

人の存在と人の死

村瀬

鋼

いまは不在の或る人に捧げられたこの論集の片隅に、人の存在と人の死についての小さな覚え書きを書きおいてみたい。

人はいて、人は現れる。そして、現れていたその人が、いつか死ぬ。それは存在の消失であるはずの何かである。しかし、これは本当のところどのようなことなのか。

私も人も、世界に姿を現す。そして各々、その現出を込みにして、その現出においてかく在ることが見えてとられる者として、各々をも相手をも理解する。相手に対してかく在るものとして自分にとっても在る、それが私たちである。

世界に現出し、相手に対してかく在る、それとは別のこととして、自分にとって在る、そのような自分というものの、たんに自分にとって在るというよりも、それが自分自身であるような自分、そのようなものがたしかにある。もしそれがなければ、何に対して在るにせよ、その在るところの当のものが欠けてしまい、もはや何が在るのでもないことになってしまうだろう。しかしその自分というものが、世界において相手に対してかく在るものとして自分においても理解され、理解されると言う以前にむしろそうしたものとして受け取られ、それが自分というものの中身をつくる、ということがある。その受け取られた、相手にとつての自分、それは、それを見、それに触れ、それに態度を採る相手の自分自身を、それを明るく浮かび上がらせる影のように纏い憑かせながら、その同様に情緒的な影に密かにではあれ応答する情緒的な在り方に染められたものであるだろう。またそのような自分は、同時に、たんに相手に対しての自分を感じることに於いて情緒を持つというのみならず、まさに相手を感じることを、相手を見、相手に触れ、相手

に耳を傾けることにおいても、その喜びや悲しみを、その情緒というものを持つ。その情緒は、一方ではまさに自分を感じることであり、むしろそれ自体が私自身であることになるような何かであるのだが、他方ではまた、相手を感じることで、感じるという仕方を知ること、同様に情緒的な存在と観じられる相手の自分自身を相手のいるその場所に認めることでもあるのだ。

かくて、私も人も、世界に姿を現し、その世界のなかに各々自身と相手とを見出すのであって、各々の在り方は各々自身の現出と混ざり合い、各自の現出が相手に対するものでもあることによって、相手の現出とも現出する相手自身の在り方とも絡み合っている。

このようななかであって、人が死ぬとはどのようなことだろうか。それは、たんに現出の消滅ということではないであろうし、むしろ現出の消滅とは本質的に違ったことであろう。むろん、人が死ぬれば、私はもうその人に会うことが、つまりいわば「現実」にその人に会うことができなくなる。けれども、人がたんに遠くに行ってしまうと、もう二度と会えそうになくなることは、その人の死とは呼ばれない。現実的に、ないしは事実上、もうその人と二度と会えなくなることは、その人が「いなくなってしまう」ことである死とは、本質的に異なったことである。遠く行ってしまった人は、決して本当には「いなくなってしまう」わけではなく、どこかに「いる」のである。死によって消滅するのは、現出ではなく存在、現出がその人の現出であったところの当のその人自身である。現出の方は、むしろ、その人の死によってすらいわば生き残る。いや正確には、その言うところの現出は、それをその人の現出となしていたところのその人自身を権利上喪ってしまったがゆえに、すでに当の現出としての確実さをも失い、その名に十分にふ

さわしくはないものになっているのだが、それでもなお、現出の等価物、或いはむしろ「痕跡」という名で呼ばれるべきかもしれない現出の重種ではありうるのである^{二〇}。

例えばまず肉体、もはや死体となりながら、なおも「その人の」肉体であるところの死体は、そのような種類の現出である。そこにはもうその人はいないのだから、またそこにもうその人がいないという了解をこそ私たちはその人の死の了解となしているのだから、その肉体にその人の名を付けるのはどこか奇妙なことであり、そこには、心身合一と心身二元論を同時に生きざるをえないような私たちの存在の形而上学的本質がほの見えもするのであるが、その矛盾を論理的矛盾としてではなく一つの悲しみとして生きる私たちにとって、そこにある「その人の」亡骸を愛おしむことは自然な振る舞いなのである。また、もはやその人がそこに居合わせることはないが、そこに自らを表現していたと思われるもの、その意味でその人の現出という資格を自らの創設時に授けられていたもの、その人の「作品」とでも言うべきものが、その人の死後のこの世界には残されている。その人の書いたものを始めとして、その人が様々な意味で「つくった」もの、また、その人自身の意に従ってはいなかったにしてもその人の在り方を映している肖像や調査や記録、その人を写したものとやその人について書かれたもの、そうしたものの一切が、その人の生前にはその人のこの世界での真正の現出の諸形態として同様にあったものとして、その人の死後も変わることなくその人の存在を示し続けている。その存在はもはやないのであるが、それらの「作品」が私にその人をおもわせるその仕方は、その人の生前とまったく変わりはない。一人で部屋に籠もってその人の著作を読む私にとって、その著作が様々なことを示すその仕方は、著者が生きていようと死んでいようと、本

質的には変わりがない。その意味では、逆に「作品」一般はすでに作者の死の恒常的な可能性を構造的に内蔵している。だから、その一切が人間の作品でもあるようなこの世界全体は、そのまろごとが生の世界であるのと同時に死の世界でもあるのだ。むしろ、本質的に「現出」の世界であるような世界は、まさに現出の世界であることによって「存在」を隠蔽し、むしろ排除しさえして、そこに現出する人自身の生そのものを視野の外に追いやるのである。そこから言えば、この世における栄光に満ちた生というものは幻である。なぜなら、この世に現出しないところにこそ、生の本当の栄光はあるのだから¹¹⁰⁾。

人が死んだとき、私はその人の現出、ないし現出の亜種によって、或る慰めを得ることができ。その人の写真を見、その人の手紙を読むと、まだその人が生きてるように感じられるし、そのようにしか感じられない。仮にその人の死という事実についての、実際には単純ではない込み入った認識が、そう感じることの制止し、場合によってはこの認識とこの感覚との対比によって、その人を感じることの喜びをその人の不在を認めることの苦痛によって引き裂くことになるにしても、それ以前にまず私は、認識よりも感覚によってこそ自らを養っている一人の人間として、その人の諸々の痕跡をまさにその人の現出として感じ、そこに、存在しているはずと思われるその人を、まずは、その人の生前にそう感じていたのと同じ仕方、考えるより先に言わば錯覚的に（とはいえ、或る理由から、それが真に錯覚であるのかどうかは、決して確認されはしないのだが）感じてしまわざるをえない。

そして実は、私の存在それ自体が、その人の作品でもあるのだ。その人に対する私の現出、その人に対して現れていた私の現出を私自身の現出と理解することで私が自らの存在のうちに受け入れた私の在り方

は、私に向けられたその人の笑顔や怒り、その人が私の傍らで世界に対して向けていた喜びや悲しみと混ざり合っているのであって、それ自体が、存在していたにちがいないその人の或る現出、或る痕跡、或る作品としての性格を備えているのだ。

そのような意味では、その人が死んでしまったとしても、非常にたくさんのもが私には残されているのだ。私たちが、身近な人の最近の死には悲しんでも、大昔の人の死についてはもはや悲しむこともあまりなく、例えば死を超えて残り続けているその人の作品について、そもそも死などなかったかのように饒舌に語りうるように、身近な死者に関しても、たんに遠くに行つて会うことが難しくなった人であるかのように幻想しさえすれば、淋しさもさほどのものではない、と言うより、たんに淋しいという程度のことではなくなつてしまふところがある。

けれども、繰り返し確認するならば、それが死ということではない。たんに事実上二度と会えなくなつてしまうことを、私たちは死と呼ばないのだ。死とは、その人の現出にもはや立ち会えなくなることではない。当たり前なことだが、死とは、その人が存在しなくなることなのである。

それにしても、その人の「存在」とは何か。

その人の「現出」というのはたいしたものである。それこそが私にその人の「存在」を教えたもの、私の目に耳に皮膚に否応なくその人の個性的なあり方を示したもの、もし私がその人を愛していたとしたならば、その人の死後にでも、残り続けるかぎりのそれを、その人の代わりか、いまやほとんどその人自身のようにして、どこまでも愛おしみたいと思わせるものである。またそれは、たんに私の思い込みの過剰

さによってそのようになっていない。その人の現出は、その人自身がそれを自らのものとして見出し、或る意味ではナルシスティックな、別の意味では自己放棄的な愛憎を以て、よく考えてみれば実はそこそこお似合いの衣裳でしかないかもしれないそれに、あたかもそれが自らの肉体であるかのように、或いは場合によってはそれこそがまさに自分自身であるかのようにして、馴染んできたものでもあったからだ。

そのようであつてみれば、その人の残した現出を愛することが、またその人自身を愛することであると、そう私が思つたとしても、不思議なことではないだろう。もし仮に、いまはこの世の人ではないその人が、草場の陰から、その人の残した現出が愛されているのを見るようなことがあつたとしたら、その人は、まさに自分自身が愛されているのだとたしかに感じるのであるまいか。また、残された者の方も、おそらくは、草場の陰のその人のことをどこかで否応なく空想しながら、当の現出ないしは痕跡を愛しんでいるのにちがいない。残された私にとつては、実は、そこに痕跡がある以上は、その人がもはや存在していないなどということは、たとえ頭ではそう考えて自分にそう思い込ませようとはしてみても、心では本当には信じてることができないことなのだ。だからこそ私はいつも、自分の世界の草場の陰に、亡くなった人の、臆だけでも頑固な存在を住まわせている。翻つて言えば、実はその人の存在は、生前から、この世にあつては草場の陰でしかないようなところにこそあつたのではなかつたのか。

こうしてこの世の賑やかな現出のなかにあつて、その人の現出は私にはやはりたいそうなものである。けれどもしかし、それはたしかにたいそうなものではありながら、それがその人の存在そのものでは決し

てなく、その存在は、もしそれが在るとして、むしろ草場の陰のようなところにしかありやうがないことを、私はどこかで知っているのだ。知っている、と言うより、そうなっているなかで生きている、と言わなければならないのだが。

こうしていくども同じ問いが舞い戻ってくる。たんなる現出ではないその人の「存在」、それを私はどう考えればよいのだろうか。

その人の存在、或いはむしろ一般に「人の」存在というもの、それは決して「物」の存在のようなものではない。いや、「物」の存在についても、私たちはよく理解しているとは言えないのではあるが、私たちの思考の自然な轍として、「人」と「物」とを区別する仕方があり、それはその区別を具体的に何に適用するかの問題の事前にあつて、思考のカテゴリーとして堅固なものだと思われる。

「物」は、私がそれについて知ることにおいて、ないし知りうることにおいて、その存在が尽きてしまう。私がそれについて見、触れ、聞き、嗅ぎ、味わい、感じ、予見する、それがその存在の全てである。要するに、ここでの言葉使用で言えば、物の「存在」はその「現出」に尽きる。「物」は私の、身体を持つことにおいてそれ自体が一つの物でもある私の、まったく相関者なのであつて、私の広義での諸々の認識能力がその展開の先で開示する諸内容に、その存在が尽きてしまう。なるほど、相関者としても、相関者であるからには、それらの諸内容を支えている或る「何か」、いわば「実体」のようなものがあるのだければならないようにも思われるが、その「何か」は、仮にあるとしてみても、それらの諸内容を除いてしまえば、中身を持たぬ空虚な点にすぎない。その「点」は、その諸内容、つまり可能的なものをも含めた

その諸「現出」の集約点として理解すればそれで済み、それ以上は、無ではなく何か或るものが存在するのはなぜなのか、という類の形而上学的考察に移るのでもなければ、私たちの関心を要求するものは他にない。私たちが「物」と呼ぶのは、そのような存在のジャンルである。

「人」の存在はこれとはちがう。「人」の存在は、私へのその「現出」に尽きてはしまわぬもの、およそ「現出」とは別のものである。それはその「現出」が、虚偽的な要素をつねに含む「表象」の類であるからではない。むしろ現出が表象であることはあり、「表象」はここでの言葉使いでは「現出」の一種である。しかし人の存在の私への現出には、表象と言うには相応しくない、なまの現出、じかな現出というものがある。物の現出についてもそう呼びうるものももちろんある。けれども、どうしてだか、おそらくは後に少し触れることになるであろう事情で、人の現出においてこそ、なまの現出のなまましさ、じかな現出の直接性は特に際立つのである。例えばその人の肉体、その人の肉声に、じかに触れるようなことがある。その人の表情や仕草において、その人の喜びや怒りが私の心を震わせることがある。むしろそうしたものがまさに「人の」現出であり、このなまなましくじかな「人の」いる感じ、それは「物」には決してありえないものなのであり、それを経験するそのつど、私を「人」の世界に戻し、私たちを「人間」たらしめるものなのである。

だから「人」の存在は、その現出において、まさにこれを直接的な現出とする仕方、それ自身を私に告げる。にもかかわらず、その「存在」は「現出」に尽きはしない。たとえ、現に成立している現出のみならず、可能的な現出までも入れたとしても、そうなのである。私がその人の現出にどれだけ心動かさ

れ、仮にあたかも身も心もすべてその人の存在に染められたかのようになったとしてさえも、それはどこまでも私への現出でしかない。それは、仮にいまや私自身の存在となってしまうとしてさえも、やはりその人の「現出」でしかない何かとして、その人の「存在」からはどうしても区別されざるをえない。私への現出に尽きない仕方、尽きないばかりかそもそもその「現出」ではないものとして、当のものの「存在」がある。だからこそそれは「人」なのである。そして私たちが、「人」については、「存在」とか「ある」とかいう、一切のものに均し並みに適用される言葉よりも、むしろ「いる」という独特な言葉を使いたくなるのも、おそらくはこのような事情に関わっているのであろう。

ただ、一見明らかに矛盾した言い方であるのを承知で言えば、このような人の「存在」は、或る意味ではまさに或る「現出」そのものなのである。とは言え、それは「(その人の相手たる)私への」現出でもなければ、私と共有されている建前の「世界への」現出でもない。それはその人自身への現出、内在的な現出なのであって、これは通常、私たちが「感情」や「気持ち」と呼ぶものを典型とし、「心」や「魂」と呼ぶものをその場として想定するような或るものである。それは、私が私自身のところと同様なものとして持つ内在的な現出と、おそらく同種のものである。私自身のところにある「心」は、人の現出に触れて揺り動かされ、或る「気持ち」を顕現させ、そのときその顕現は、その人の現出の私における受肉、ないしはその人の私への現出の現実性そのものとなっている。そしてそうしたものとしての私の「気持ち」は、これを触発しているものとして、同様に「気持ち」であるような相手の存在を想定しており、その存在を、自らの多孔質の輪郭でもって、一つの空虚として——いわば「**凹**」たる自分に欠けることよって自分を補つ

ている或る「地」として——浮かび上がらせるような仕方で、それ自身でもって描きだしてもいる。にもかかわらず、その相手の気持ちは、私の気持ちには還元されるどころではない。その相手の気持ちは、私の気持ちとははつきりと「別」のものであり、だからこそそれは「私」ではなく「人」なのである。

私が確認しようとしているのは、或る意味ではきわめて当たり前のことにすぎない。それは私は私であり、人は人であるということ、私は「自分」だが、人は「他人」であり「他者」だということである。当たり前のことなのだが、しかしこれは、私たちがいくら驚いても驚きたりない驚異であり、いくら説明しようとしても説明されることのない神秘なのだ。

人には「内面」があるとと言われる。それが人の「存在」である。その「内面」は、物体である箱の内部のようなものとは違う。箱の内部は、なおも「外面」でしかない。「物」には、どこまで言っても「外面」しか、つまりそれが私に対して示す「現出」しかなく、その現出の向こうの「内面」は、仮に想定したとしても空虚であり、内容がない。けれども、人には「内面」があり、それは中身を、私には決して確認できない中身を持っており、これを、私には確認できないという仕方、しかし確実に持っているのみなされることを要求する仕方を持つという点において、それは人なのである。その「内面」は、私がある存在を否応なく確認する私自身の「内面」とたしかに呼応しているはずのものと思われ、またそれは、一見すると、私自身の「内面」が私の肉体の内部に在ると感じられるのと同様に、ごく当たり前のよう、あなたも箱の内部でもあるかのようにして、その人の肉体の内部に存在しているかのように思われる。しかし、私のものではないその人のその「内面」は、当然ながら、私が自身のそれを感じるようには感じることに

できないものである上に、何か箱の内部のようにして、開けて中身を見るわけにもいかないものなのだ。仮に肉体という容器を開けて、例えば脳を無数の薄片に切り刻んでその内容を目視してみたとしても、その「内面」を見ることなどできはしない。そのようなことをせずとも、その人の笑顔を見るだけではつきりと感じるこのことができるその人の喜び、その喜び自身が、私の喜びとは別に存在しているということ、それがすでに不思議なことであり、私自身の喜びに溺れることしかできない私は、相手の喜びの存在を、喜びとしての相手の存在そのものを、結局は確認できてなどいないということ、これが、普段はもう慣れっことなってしまう悲しみの再浮上とともに気づかれる神秘なのである。その人の笑顔を見、声を聴き、肉体に触れると、私はその人のなまましい喜びに、その息づきに、直に触れているような感じをもつ。感じを持つ、と言うより、それこそがまさに「直に触れている」ということなのであり、およそ「触れている」というようなことを私たちが理解するのは、このような経験からではないのだ。にもかかわらず、その人の喜びは私の喜びではない。その人の喜びを、私は自分自身の喜びのように感じるにはしても、にもかかわらず、その前提としてさえも、その人の喜びは私の喜びとは別個のものとして、私の喜びなしに存在しうるものとして、そこにあるのだ。

「他人」というものについて、哲学は様々なことを語ってきたが、その最も簡潔な定義の一つは「私とは生死を別にする者」ということだと思ふ。「他人」とは、私とは別に生き、別に死ぬ者である。「他人」は、私が生きているから生きているわけではなく、私が死ぬから死ぬわけではない。逆も同様である。私は「他人」が死んでも生きているし、「他人」とは、仮に私が死んでも生きている人のことである。人間のあらゆる

る悲しみがそこにある^(三)。

かつてもこれからもそうであるように、いまこのときにもたくさんの方が死んでいる。私は不断、それを何とも思わない。私は平気である。それが私と他人との関係というものだ^(四)。もちろん私は、身近な者の死に心を揺すぶられるだろう。しかし、心を揺すぶられたとしても、私は生きている。その人が死んでも、その人が私に示していた「現出」の多くが私のもとにありさえすれば、その人の死はあたかもなかったことのようにさえ思われてもよい。仮に、一つの空想として、もし技術が進んでその人の姿形とその人の行動パターンを完璧に再現したその人の複製——アンドロイドやAIの立体映像——が作られるようになったとしたら、私にはそれで十分で、その人の想定される「存在」などは、そもそも私にとっては、あってもなくても同じようなものではなかったのだろうか。私は結局、その相手の「現出」によって自分の生を養われてきたというだけのことなのであり、その人の「存在」は、私自身の「存在」とは結局は関わりがないものだったのかもしれない。私が嘆き悲しんでいるのは、結局はその人の「現出」が恋しいだけなのだ。たまたま他の無数の人々に比してその人が身近であり、たまたま事実上多くの時間を過ごし、たまたま私が喜びの時を多く持った、そんな私の慣れ親しみが、その慣れ親しみの楽しさに溺れて、期待されていた楽しみの突然の喪失に動揺しているだけなのだ。その動揺も、生きている私のもう一つの慣れによって、この現出の世界のなかで、やがては静かに収まってしまふものなのだ^(五)。

だが、本当にそうなのだろうか。

或る人の死に、私は思う。その人の生は、私の生では決してない。私とその人とは、結局は別個の存在

でしかなく、たとえ各々の現出を通して交流しあうことがあったとしても、それは互いの存在のうちに互いの幻を混ぜ込むだけにすぎなかったのかもしれない。けれども、私がついて、その人がいるとき、私がついて、その人がいたとき、私は結局はその人の「存在」を確認できはしなかったのだとしても、それでも、同じ時をその人と共にすごし、その人に生身で触れることによって、私は自らの存在の全体をいわば「賭けて」、自分には手に入られないその人の存在と関わり、その存在を信じ、その存在を確信した。そのことが無であつたはずはない。もしそのことが無であつたとしたら、私たちの生の一切が無なのだ。そのことに、現に生きている私の生がその全身で反抗する。その人がいたそのとき、私の存在がその人とともにあつたとき、その人の存在が私にはかけがえないものであつたのであり、そこに、私とは別のものとしてあつたその人の存在が、私には、仮にたとえ私と出会わずにあつたとしてさえも、それ自体で大切なものだったのであり、現に——もはや喪われてしまつていにはしても、なおも——あるのだ。

私たちに最も深い悲しみをもたらすものは、私たちに最も深い喜びを与えるものでもある。人と共にあること、その人と共にあること、これ以上に深い喜びがこの世にあるだろうか。いや、それは実は、この世界のなかでの一切の現出から逃れるところに存するがゆえに、むしろ、この世のあらゆる喜びを超えた、この世ならぬ喜びなのだと言ふべきなのかもしれない。しかし、その前でこの世のあらゆる鮮やかな美と快とを色褪せさせるこの喜び、私たちが「魂」という言葉で呼びたくなるような私たちの核心部にあるこの透明な喜びはまた、或る意味ではその一切が幻でもあるようなこの世をまさに「この」世たらしめ、まさにこの「現実の」世界たらしめている、その当のものでもあり、この世の大半の事象の持つ性格である

あらゆる悪ふざけと冗談との陰にあって、私たちに最終的な真面目さを要求する当のものでもあるのだ。いったい、私たちの生きていることの意味というものは、これを知ることを描いて他にどこにあるのだろうか。もしおよそこの世が何らかの美しさを備えているのだとすれば、それは本当のところ、砂漠のどこかに隠された井戸のようにして、この世の陰のようなどこか、しかし空想されるだけではない或る確かな実在の場所に、この喜びを私にもたらず当のその人自身が「いる」からなのではあるまいか…。

そうであればこそ、翻って、その人の死後、その人の残した諸々の現出を愛おしむことは、結局はただの慰めでしかない。慰めであることも、慰めでしかないことも、しかし或る意味ではまた慰めでもある。なぜならそれは、そうしたものがただの慰めにしかならない仕方、私にとってその人の「存在」が実には大きなものであったということなのだ。それは、私がその人といった時間の確かさを、反対に私に教えにくる。しかしまた、だからこそまさに、その人の喪失はどんな慰めをもっても埋め合わせが効かない。埋め合わせる場所に存在しうるのは、その人自身を描いて他になく、そしてその人はいまや、いないのだから。その事実を引き受けることなど私にはできはしない。できはしないのに生きているのだとすれば、私は、その人のどこまでも間に合うことのない身代わりとして——いわば「奉仕の気持ち」^(五)で——、空しく苦しみ、空しく喜んで、生きて死んでいくということになるのだろうか。

私にはわからない。

註

(一) この等価物、「痕跡」または亜種を「現出」から区別することは、考察の文脈次第では重要になってくるであろうし、こうしたもののなかにさらに細かい種別分けをしてみることも、場合によっては意味を持つだろう。けれどもここでは「存在」との区別こそが重要で、そうした下位分類はさほど大きな意味は持たない。そこで以下、「肉体」と「作品」についての考察を挟んだ後は、この種のものをすべて基本的に「現出」のカテゴリのものとして入れて考える。

(二) ミシェル・アンリ (Michel Henry, 1922-2002) の二元論のことが頭の片隅にある。

(三) シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は、非常に多くの点からして、恋愛について書かれた文学作品の最高傑作の一つである。その有名な結末部で、ロミオは、まだ生きている仮死状態のジュリエットを見て死んでいると誤認し、恋人の死に遅れまいとして自死する。目覚めたジュリエットは、死んだロミオを発見して、やはり自死する。この誤認とこの時間差とこの悲嘆のなかに、人間の対他関係の本質が見事に表現されている。

(四) 「他者とは何かということ——束の間の恐るべき閃きのときを除いて——つゆ思ったこともなく死んでゆく人々がいるのだ」[*Il y a des hommes qui meurent sans avoir — sauf pendant de brèves et terrifiantes illuminations — soupçonné ce qu, était l' autre*.] (サルトル、『存在と無』第三部第三章、Jean-Paul Sartre, *L' être et le néant*, Gallimard, tel, p. 421.)。この一節は、サルトルの書いたもののなかで最もすばらしいものの一つではなからうか。

(五) 中原中也。